

ケアリング概念に関する研究動向と

今後の研究課題の検討

酒井郁子 中久喜町子 遠藤淑美 佐藤正美 山本広美

要 旨

今後の看護実践におけるケアリング研究の課題を検討する目的で、過去5年間の欧米、日本におけるケアリング概念に関する研究論文について、研究の探求レベル、研究課題のタイプ、使用されている研究方法、および得られた結果の内容について分析、検討を行った。その結果研究の今後の課題として探索型研究を丁寧に行い、ケアリング概念の構造化の発展を図る必要があること、検証型の研究を行っていくための研究方法論についても議論していく必要があることが示唆された。

I はじめに

M.M.Leininger (1991) によれば、ケアリングは看護の中心的概念であるといわれている。

われわれ看護者はケアリング概念について、依って立つ哲学的基盤として抽象的な議論を繰り返してきた。しかしこれでは、ケアリングの実践者であるところの臨床看護者の看護活動や臨床判断に活用できる知識として蓄積されない。

これまで行われてきたケアリング概念に関する文献研究は、ケアリングの概念分析を行っているもの、研究者および理論家がケアリング概念の研究を行う際に基盤としている哲学や理念について探求したものがある。

また日本では、筒井 (1993) が欧米における文献検討を行い、ケアリング概念の概念分析をおこなった。その結果、ケアリングに必要な先行条件、定義、結果について明らかにされている概念を抽出している。操ら (1996) は欧米のケアリングに関する研究結果の内容分析から看護におけるケアリングの構造を患者からの視点も含めて解明しようとした。

以上の研究からケアリングに関わる概念および諸属性と構造に関しての知識が深まっていることがわかる。

一方、看護学が実践科学である以上、実際の患者に対する効果的なケアを進歩させるために看護者のケアリング行動をどのように活用するか、あるいは看護者のケアリング能力の発達や開発の促進をどのように行っていくかといったような、状況産生あるいは規定検証的な研究にまで発展させていく必要があると考えられる。しかし現在のケアリングに関する看護学研究の探求のレベルはどの程度なのか、ケアリングに関する研究課題のタイプや得られた結果の内容はどのようなものなのかについてはいまだ詳しい文献検討は行われていない。

そこで本研究は、過去5年間の欧米、及び日本のケアリングに関する研究論文について、その研究の探求レベルと研究課題のタイプ、使用された研究方法、および得られた結果の内容に関して分析検討し、ケアリングに関する研究で得られた知識の看護実践に関する有用性、および看護実践におけるケアリングに関する研究の今後の課題を検討することを目的とする。

II 研究方法

1 研究期間

平成9年4月1日から同年10月31日

2 対象となる文献の選択と対象文献の概要

1) 欧米文献の検索方法と概要

欧米における過去5年間のケアリングに関する研究論文について、MEDLINEおよびCINAHLによるデータベース検索を行った。検索時のkeywordsはCaring & Care & Nursingとした。その結果MEDLINEでは1993年から1997年5月までの期間で350件、CINAHLでは同期間で293件が検索された。これらの文献について、以下の基準で本研究の研究対象論文を選択した。

すなわち①原著論文であること、②文献研究をのぞくこと、③ケアリング概念に焦点を当てた論文であること、であった。その結果選択された29件の欧米論文を本研究の研究対象とした。

2) 日本文献の検索方法と概要

日本におけるケアリングに関する研究論文については当初欧米と同様の手順で検索しようとしたが、同様のデータベースに蓄積されている日本文献がほとんどないため、以下の手順で検索を行った。すなわち、データベースを日本看護関係文献集 Vol.26 (1993年)、および最新看護索引 1993年3号から1997年7号までとし、keywordsをケアリングとした。そしてタイトル

とその論文内容にkeywordsが含まれるものすべてを検索したところ、14件の論文が検索された。そのうち原著論文は3件であり、うち2件が文献研究、実証的研究は1件であった。その他の11件の論文は総説、講演記録、寄稿であった。本研究の対象として欧米文献と同様の基準で実証的研究1件を選択した。

3 使用した概念枠組み

われわれは看護学における研究の目標は患者のケアの進歩であるとする前提に立つ。

その上で、本研究の分析のために使用した概念枠組みはドナ・デイヤー (1984) による看護学研究の探求のレベルと問いの種類、研究課題のタイプ、および答えの種類である。探求のレベルには1から4まであり、それぞれの問いの種類は1はこれは何であるか、2は何が起こっているのか、3はもしーすれば何がおこるだろうか、4はーを起こすには私はどうするかに分類される。それぞれの研究課題のタイプは、1が因子探索型、2が関係探索型、3が関連検証型および因果仮説検証型、4が規定検証型である。得られる答えすなわち研究結果の種類は1, 2の探求レベルでは理論あるいは仮説の生成であり、3, 4の探求レベルでは理論の検証および状況の産生である。

以上の探求レベルおよび研究課題のタイプは一定の発展過程を示すとされている (図1)。

本研究の目的からわれわれは以上の概念枠組みを使用してケアリングに関する研究論文を、臨床での看護実践の進歩にどのように有用か、今後ケアリングに関する研究で行っていく必要のある研究課題は何かという視点で分析することにした。

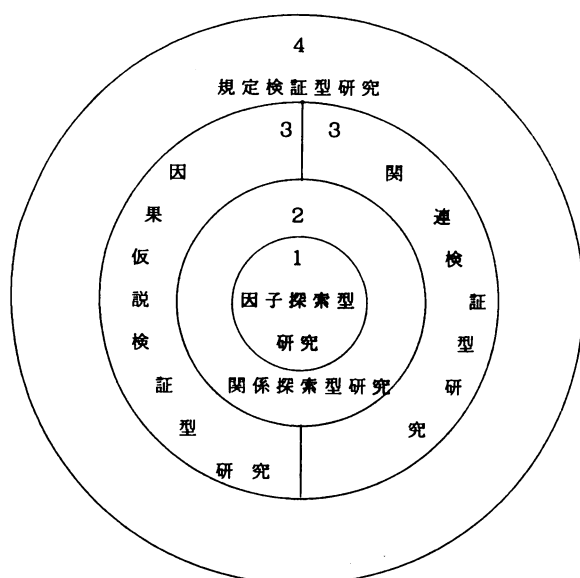
4 分析方法

欧米の研究対象論文29件について3段階に分けて分析を行った。

第1段階は上記の概念枠組みに照らして、研究の探求レベル、研究目的、研究対象、研究方法、分析方法、得られた結果について対象論文を整理した。

第2段階は研究者たちがケアリングに関する研究で何をしようとしているかを把握するためにそれぞれの論文を研究の探求レベルごとにまとめ、どのような問いがあるのか、研究目的について内容分析を行った。

第3段階はケアリングに関する研究によって看護実践を進歩させるために有用な結果がどの程度



(図1) 研究の探求レベルと研究課題のタイプの発展過程

資料出所：数間恵子他「看護研究のすすめかた、よみかた、つかいかた」p25 一部改変
日本看護協会出版 1994年)

得られているのかを把握するために、研究の探求レベルごとに得られた結果の内容について内容分析を行った。

また日本の対象文献1件に関しても、同様に分析を行った。

III 結果

1 欧米におけるケアリングに関する研究論文の動向 (表1)

欧米におけるケアリングに関する研究論文29件のうち、因子探索型の論文は21件であった。関係探索型の論文は7件であり、関連検証型の論文は1件であった。

因子探索型の研究論文で使用されている研究方法の特徴について述べる (表1その1)。まず1993年から1994年までは内容分析およびテーマ分析による研究方法を使用している論文が目立ち、1995年以降の論文では、内容分析のほかにgroundedtheory、現象学的方法、解釈学的方法、文化人類学的方法などが使用され、因子探索型の研究手法が豊富になっている。また扱っている研究対象の領域についても、従来ケアリングに関する研究論文が多かった看護教育および基礎看護領

域の研究のほかに、老年者看護、地域看護、周手術期の看護、クリティカルケア、ホスピスケア、癌看護など研究対象に選択されている領域が幅広くなっている。

関係探索型の研究は全部で7件あった (表1その2)。このうち4件が実際の患者を対象とした、患者のケアリング行動に対する認識を問う研究論文であった。また2件が看護教育におけるケアリング能力や、ケアリングのモラルと影響要因の関係の探索であった。また1件は患者とスタッフのケアリング行動の認識の関係や相違について探索していた。使用されていたケアリング行動の測定用具はCare Behavior Assessment Scale (CBA)、Caring Assessment Instrument (CARE-Q)、ケアリング能力測定スケール (Caring Ability Inventory) の3種類であった。

関連検証型の研究は1件あった (表1その3)。これはケアリング能力を発達させる効果があると予測された教育プログラムの効果を、他の教育プログラムと比較し検証していた。ここではこの教育プログラムの効果の評価を障害者に対する態度スケールの肯定的変化によって測定していた。

(表1) 欧米文献において分析対象とした研究概要 その1 (因子探索型研究)

研究者名	研究目的	研究方法	結論
B. M. Raudonis (1993)	ホスピスケアを受けている患者の、ホスピス看護婦との共感関係の意味づけの探索	在宅ホスピスケア患者14人(44-86才)を対象に、半構造化面接内容分析	共感関係の発展: ケアリングのなかで人生を互いに分かち合い話すプロセスを通して発展。 共感関係の意味: 個人、人間の価値を認められる共感関係の効果: 患者のwell-beingを高めていた
K. Kinb(1993)	良いケアとして患者に認識された看護行為や態度の探索	慢性リウマチ患者6人を対象に、面接および観察内容分析	患者が認識している看護者のケアリング行動を、信頼を築いていくものと意味付け。そのテーマは、やさしい接し方、自己確信、患者自身の知識に対する認識に影響する、情け深い接近。
L. Trojan., O. Yonge. (1993)	ホームケア看護婦と在宅老人患者の信頼関係の発展過程の探索	7人のホームケア看護婦と、6人の60歳以上の患者を対象に、半構造化面接インタビューによるコアコンセプトの抽出	ホームケア看護婦と在宅老人のケアリング関係の発展過程 ①initial trusting: 一般的な信頼、受け入れ、尊敬、技術への信頼 ②connecting: 知るために与えるコミュニケーション、評価 ③negotiating: コントロール、ゴール設定 ④helping: 擁護、サポート提供、教育、治療提供、器材提供、個人的成長の援助。
R. B. Hyman., W. Bulkin., P. C. Woog. (1993)	熟練看護の技術を探査	19人のスタッフ (ハウスキーパー、助手、秘書、ソーシャルワーカー、看護婦) を対象に、半構造化面接および観察 テーマ分析、継続的比較法	熟練看護の技術のコンセプト love: 食、ケアリング death: work: 起こったことに対する信念 役割の定義づけ、統合、プロ意識、組織のイメージ

(表1) 欧米文献において分析対象とした研究概要 その1 (因子探索型研究)

研究者名	研究目的	研究方法	結論
Z. R. Wolf. (1994)	RNが心停止後のドナーへケリングを行う時の反応とその決意の意味の探索	11人のRN(23-46歳)のグループセッションを録音 テーマ分析	RNの反応 著しい医療技術の進歩への憤り 家族からの起訴の恐れ 心停止後のドナーは痛みを感じ得る RNの関心 ①生命維持処置をしないこと ②患者の望みどおりにすること ③家族の苦悩を証言すること ④看護ケアを資源として活用する
G. Poole., K. Rowat. (1994)	地域老人の、ホームケア看護婦のケリング行動に関する認識の探索	多面的ケーススタディ 5人の地域訪問看護を受けている老人を対象に、半構造化面接およびケア時の観察、援助が必要だった状況について話し合う 分析 継続比較法	ケリングの認識：看護婦の寄与、情緒的サポート、身体的サポート 文脈としてのケリング：身体的健康、心理社会的健康、患者看護婦関係 ケリングの認識と文脈としてのケアリングの関係：2人の患者から出されていたケリング行動=身体的サポートを含むという考えは新しいケリングの枠組を示唆。 ケリングのモデル：看護婦の寄与→患者へのサポート提供→学習し対処することを可能にする→患者の成長と発達
M. Mary., R. Kosowski. (1995)	看護学生の臨床実習におけるケリング学習過程の探索	学士課程看護学生18名を対象に、現象学的アプローチによるデータ収集 継続比較法 modified Collaizi method	ケリングの学び 反面教師、ロールモデル、知識と体験から組み立て、感じる、イメージする ケリングの創造 丸ごとの存在としてある、擁護する、能力がある、タフネス、分かち合う、心地よい感じ、関連付ける。
B. L. Paterson M. Crawford., M. Saydak., et. al. (1995)	男子学生のケアの学びの経験の探索	20人の看護男子学生を対象として、看護者としてどのようにケアするのかを学んだ状況やできごとの分析 テーマ分析 Collaiziの手法	ケアを学ぶことのテーマ ①発達としての学習 ②臨床体験の性質 ③学習方法
S. A. Mcnamara (1995)	看護婦の周手術期におけるケリング行動の実際と認識の探索	5人の周手術期看護婦を対象に、半構造化面接および観察 12項目の質問のうち10項目はワトソン因子から抽出し、生きられた経験に焦点を当てた 内容分析	周手術期のケリング行動の実際 術前：信頼関係の構築、患者の支持、安全の確保 術中：身体的ニーズ安全確保の予防手段 術後：安全、身体的ニーズへの対応 ケリング行動の構成要素 人間関係の構築、精神的身体的環境の支持、維持、調整
S. Herberts., K. Eriksson. (1995)	ケリングスタッフ、看護リーダーの看護観の特徴の探索	20人のリーダーと49人のスタッフを対象に、健康観に関する自由回答の面接 内容分析	健康の領域は、健康になる、健康でいる、健康を獲得する。 健康観は多面的、健康の理想的イメージは曖昧、スタッフは患者と健康観が違っていると考えている。 看護婦は患者のためにしてあげたいことをできていないと感じている。
E. Davies. (1995)	看護の理論と実践の乖離の克服のためのメカニズムとして、看護学生はどのようにしてリフレクションを使用しているか	看護学部1年生6人を対象に、カンファレンス実習記録および面接よりデータ収集 リフレクティブモデルを使用 グラウンデッドセオリー	1 回目の実習後 自己と他者の関係を知る。 2 回目の実習後 自分自身の個人的な学習のニーズに気づく 3 回目の実習後 解決の必要な問題に気付く。 「何かが起こっている」から、「個人的な考え」、次に「患者の問題」へと焦点が変化。

(表1) 欧米文献において分析対象とした研究概要 その1 (因子探索型研究)

研究者名	研究目的	研究方法	結論
S. Janhonen. (1993)	看護教員が捉えている、看護および質の高いケアを提供するための条件の探索	17人の看護教員を対象に、インタビューによるデータ収集および分析	看護教員がとらえている看護 ①看護の本質にあるものはケアリング ②ケアリングのサブカテゴリーは互いに知り合おうとする関係、分離 ③質の高いケアに必要な条件 患者理解、看護のアート、他の専門職との協力
T. P. Nelms., J. M. Jones., D. P. Gray. (1993)	看護学生が教師のロールモデルから学んでいるケアリング行動の探索	看護学生137人を対象に、教師のロールモデルから学ぶ場面をビデオ録画 内容分析 継続比較法による分析	教師のロールモデルから学ぶ内容は、実習で看護婦から学ぶものと同様 抽出されたカテゴリーは、 connection, caring, relationship
V. M. H. Lau., A. Mackenzie. (1996)	精神障害患者への看護婦のケアリング過程に関係する看護婦の特性の探索	施設入所している精神障害を持つ患者の関係者13人（両親、兄弟）を対象に、インタビュー 文化人類学的アプローチによるデータ収集および分析。	患者関係者が認識している良い看護婦の特性 ・患者に対して、患者を個人的に知ろうとする個人的なケアを行う。 ・ケアリングのキャリアに対して積極的な態度、困難な仕事に対して臨床能力を示す。 ・関係者に対して、親しみやすさ
J. Jenny., J. Logan. (1996)	人工呼吸器装着ウイニング体験について患者が使用したメタファーの意味の探索	ICUから病棟へ移って5日以内の成人患者を対象にインタビュー インタビューによるデータ分析	ウイニングに関する患者のメタファーの3つの分類 ①身体的苦痛 ②ナースのケアリング ③ここはどこ？ 私は誰？
C. A. Chesla. (1996)	一般的なクリティカル看護の中で、家族に行われている看護実践の探索	130人の看護婦を対象に、小グループによるインタビュー(3回) 現象学的解釈学的アプローチ	・家族へのケアには幅広い技術がある。が、幾人かは家族を含めたケアの重要性を認識していない ・クリティカルな患者を心配する家族へエキスパートなケアを提供。 ・医学的なケアに焦点を当てるために、ケアリングがおろそかになっていることがある。
A. Juntunen., M. Nikkonen. (1996)	ハンソン族看護婦の看護の記述、および専門的看護ケアの構成概念の探索	6人のハンソン族看護婦を対象に文化人類学的アプローチによるデータ収集および分析 インタビューによるデータ分析方法	・看護の記述 正式のトレーニングにもとづく、実の母と子の関係にもとづく、生命に対する尊敬の念が看護ケアを左右している。 ・専門的看護ケアの構成概念 ケアリングとケアリングに分類 ・ケアリングの構成概念は、擁護、激励、安楽
H. A. Milne., C. L. McWilliam. (1996)	資源としての看護の意味の探索および構造化	3人の患者、6人の看護婦、2人の管理者を対象に、現象学的アプローチによるデータ収集および分析	ケアリングの中心概念は TIME ケアリングタイムの要素 ①being with ②doing to/doing for 全体の構造 spending time
L. Coulton., M. Mok., K. Krause., et. al (1996)	看護学生が認識している、看護ケアの優れた意味の探索と構造化	156人の看護大学生、125人の院生を対象に、自由回答式 質問紙調査 内容分析 テーマの探索	優れた看護ケアのテーマ ①専門性 ②ホスピタリティ ③実践 ④ヒューマンズム
T. P. Nelms. (1996)	看護においてケアリングの存在と、生きることの隠されたパターンの探索	5人の看護婦を対象に、ハイデガー哲学による解釈学的方法	看護におけるケアリングのテーマ ① timelessness and spacelessness ② creating home ③良心から湧き起こる気持ち
C. T. Beck (1995)	認知障害高齢者にケアする看護学生の体験の構造化の探索	看護学部生37人を対象に、現象学的アプローチ (Colaizziの方法)	学生が体験したテーマ：たくさんの感情の経験、困難な課題としてのケアリング、ケアリングの困難さが多様なアプローチを生み出す、否定的影響、肯定的影響

(表1) 欧米文献において分析対象とした研究概要 その2 (関係探索型研究)

研究者名	研究目的	研究方法	結論
P. J. Larson. (1995)	患者にとっての看護婦のケリング*行動の重要性の探索	57人の癌患者を対象に care-Q を使用 記述統計	重要と思われるケリング*行動 ・モニターとフォロー-I.V.や器材の管理、医師をいつ呼ぶか、身体的な良いケアの提供、薬や治療の適切な提供 ・信頼関係-何をおいても患者さんを最初に考え実施 ・安楽-傾聴、話し合い 重要と思われていないケリング*行動 ・なんでもないことをやってあげる。 ・患者と一緒にいる時に患者に集中する。 ・患者が現実的なゴールを描けるように援助するなど。
W. Reid., A. Long. (1993)	自殺の恐れのある患者へのケリング*の役割、関連技術、スーパー*セッションの有りに関する看護婦の理解の探索	精神科救急病棟の50人の看護スタッフを対象に、質問紙調査 (45人の回答) 記述統計	自殺予防介入には、治療的介入と共感的看護ケアの開発が必要。これらの技術を含んだケアを患者が体験する必要がある。
K. N. Huggins. W. M. Gandy., C. D. kohut. (1993)	①トリアージ*レベルはケリング*行動のクラスを評価しているか ②患者の個人的な関心はトリアージ*レベルと関連しているか ③臨床的に重要な行動の量はトリアージ*レベルで違うのか ④臨床的に重要な行動の種類はトリアージ*レベルで違うのか ⑤満足度の得点と行動には関連があるか	救急病棟を退院して30日以内の患者288人 (エマージ*エンス-81人、ノン*エント99人、ノン*エント108人) 電話面接調査 CBAスケールの電話用モ*イ*ファイ使用 記述統計 χ^2 検定、ANOVA	救急病棟にくる患者はトリアージレベルと患者の主観的な症状の評価は関係がない。すべてのケリング*行動においてノン*エント患者の方が高い期待を持っている。 救急病棟において、ノン*エント患者の方が数が多いが、これらの患者は集中*を必要としないため救急病棟ではその点*には答えられない。 ケア提供者の技術のほかに何か患者のケリング*体験を決めているのか探索する必要がある。
E. Peter., R. Gallop. (1994)	ケリング*と看護学生独自のモラルの関係の探索	看護学生68人F、医学生25人F 医学生25人Mを対象に、測定用具 recall task, the clinical dilemma, lyons coding schemaを使用 U検定、 χ^2 検定、ANOVA 内容分析	・看護学部生は判断よりも*を使っている ・看護学部と医学部の間には違いがあったが、それは学部の違いではなく性別の違い。 ・ケリング*のモラルは看護独自のものではない。
L. v. Essen., P. Sjoden (1995)	ケリング*行動の発生と重要性に関する、患者と看護婦の認識の探索	精神科61人の患者とスタッフ782人 内科47人の患者とスタッフ763人 外科40人の患者とスタッフ760人 測定用具 CARE-Q, CARE-often Q, t検定, ANOVA, 相関係数 R	精神科と内科におけるケリング*行動は、患者よりスタッフの方が高く認識しており、外科ではその逆でスタッフより患者の方が高く認識していた。 重要なケリング*行動のランキングは一致。しかし、精神科の患者:「説明と手助け」を最も重要。 内科、外科の患者:「モニターとフォロー」が最も重要。 それに対してスタッフは全て「安楽」が最も重要と認識。ケリング*行動の発生とケリング*行動の重要性はどの病棟のスタッフも患者も一致していない。

(表 1) 欧米文献において分析対象とした研究概要 その2 (関係探索型研究)

C. P. Latham. (1996)	看護婦のケアリングやサポートに対する患者の認識と、患者のセルフエスティーム、欲求コントロールなど人格特性との関係の探索	120人の成人急性期疾患患者 心理的危機にある患者を対象に調査。測定尺度は、 クランツヘルスベリニオンサーベイ (KHOS) SES プライマリアプレイサースケール (PAS) セカンダリアプレイサースケール (SAS) BSI サブタイプナシキング・ヘビチェック リスト (SNBS) コーピング・ストラテジー・インベントリー (CSI) 相関係数Rの算出	120人の患者のほとんどがケアリングは有益であったと示唆。若い患者ほど肯定的評価。 セルフエスティームの低い患者、要求の強い患者、痛みの強い患者は看護婦との出会いに、脅威や苦悩を認知。セルフエスティームの高い患者はケアリング経験のあとに効果的なコーピングを報告、またケアリング経験は看護婦との効果的な出会いと関係。
P. R. Simmons. S. Cavanaugh. (1996)	受けてきた母性的ケアと父性的ケア、看護学部の教育とケアリング能力の関係の探索	アメリカ合衆国の4年生の女子看護学部生ランダムに350人を対象に質問紙調査 測定用具 Caring Ability Inventory, Parental Bonding Instrument, CFK School Climate Inventory. 相関係数R	母性的、父性的ケアのレベルとケアリング能力との直線的相関はない。 しかし、より高いケアリング能力を持つ人は、母性的ケアレベルが最も高いか、最も低いレベルの人たちであった(2次関数)。 ケアリングに関する学部の風潮はケアリング能力と高く相関。回答者の52%が自分の学校の教育レベルの高さに言及。ケアリング能力において家庭教育<学校教育

(表 1) 欧米文献において分析対象とした研究概要 その3 (関連検証型研究)

研究者名	研究目的	研究方法	結論
M. H. Oermann., C. L. Lindgren (1995)	障害者へのケアリング教育プログラムは、学生の障害者への態度に影響することを検証する	看護学生(67人:ケア情報、166人:障害者の模擬体験、あるいはワークショップ)を対象にケアリング教育プログラム直前と1年後のATDPを比較。 記述統計 U検定、相関係数R, ANOVA、t-1:直前、t-2:1年	t-1のATDPに有意差なし。t-2においてケア情報グループが有意に得点上昇(態度が肯定的に)。 t-2において、有意な関連があった要因が、看護教育学年(高いほど教育プログラムの効果大きい)

2 欧米文献における研究の探求レベルと研究目的の種類 (表 2)

対象とした欧米文献の研究の探求のレベルと研究領域、研究目的の種類について述べる。探求レベル1の因子探索型研究における研究では、看護の意味や構造、あるいはケアリングの意味の探索を目的とするような、＜ケアリングの本質＞についての概念探索の研究目的が分類された。

次に患者が認識しているケアリング行動や、患者の体験の意味、および患者が認識している共感の意味などの探索といったような＜患者の認識＞に関する概念探索の研究目的が分類された。

また信頼関係の発展過程の探索といった、＜患者・看護者関係＞に関する概念探索の研究目的が分類された。

さらに看護者に認識されたケアリング行動、実際に行われている看護者のケアリング行動、看護者の特性の探索のような、＜看護者のケアリング行動＞に関する概念探索の研究目的が分類された。

最後に看護学生の認識や体験、看護教員に認識されているケアリング行動の探索のようなくケアリングの学習・教育＞に関する概念探索の研究目的が分類された。

探求レベル2の関係探索型の研究は、患者のケアリング行動の認識と人格、あるいは患者が認識しているケアリング行動の関係について探索するというような、＜患者の認識＞とそれに関わる種々の要因との関係探索という研究目的が分類された。

次にケアリング行動に関する患者と看護者の認

識の関係の探索などの、＜患者・看護者関係＞の探索に関する研究目的が分類された。

最後にケアリングのモラルと学生の属性の関係や、看護学生のケアリング能力と関係する要因を探索するというような、＜ケアリングの学習・教育＞に関する関係探索の研究目的が分類された。

育＞に関する関係探索の研究目的が分類された。
探求レベル3の関連検証型研究は、ケアリングに関する教育プログラムの効果の検証を行っており、＜ケアリングの学習・教育＞に関する領域に分類された。

(表2) 欧米文献による研究の探求レベル、研究課題のタイプと研究目的の種類

探求のレベル 研究課題タイプ	研究目的の 分類	研究目的の性質	研究目的
探求のレベル 1 研究課題タイプ 因子探索	ケアリングの本質	看護の意味や構造の探索 ケアリングの意味の探索	ハンザー族看護婦における専門的看護ケアの構成概念の探索 資源としての看護の意味の探索と構造化 看護においてケアリングの存在と生きることの隠されたパターンの探索
	患者の認識	患者が認識しているケアリング行動の探索 患者の体験の意味の探索 患者が認識している共感の意味の探索	良いケアとして患者に認識された看護行為や態度の探索 地域老人が認識しているホームケア看護婦のケアリング行動の探索 患者が認識している看護婦のケアリング行動の重要性の探索 精神障害者の関係者が認識しているケアリング過程に関わる看護者の特性 人工呼吸器装着患者が体験したウイニング体験に関するケアの意味の探索 ホスピスケアを受けている患者が認識している看護婦との共感関係の意味の探索
	患者・看護者関係	信頼関係の発展過程の探索	ホームケア看護婦と老人患者の信頼関係発展の過程の探索
	看護者のケアリング行動	看護者に認識されたケアリング行動の探索 実際に行われている看護者のケアリング行動の探索 看護者の特性の探索	看護婦の周手術期におけるケアリング行動の実際と認識の探索 自殺の恐れのある患者へのケアリングの役割に関する看護者の理解 一般的なクリティカル看護のなかで家族に行われている看護の探索 熟練看護者の技術の探索 スタッフ、看護リーダーの看護観の特徴の探索 RNが心停止後のドナーにケアリングを行うときの反応とその決意の意味
	ケアリングの学習・教育	看護学生の認識、体験の探索 看護教員に認識されたケアリング行動の探索	看護学生が認識している看護ケアの優れた意味の探索と構造化 認知障害高齢者をケアする看護学生の体験の構造の探索 看護学生の臨床実習におけるケアリング学習課程の探索 男子看護学生のケア学習経験の探索 看護学生が教師のロールモデルから学んでいるケアリング行動の探索 看護学生の理論と実践の学びの乖離防止にリフレクションが果たしている意味の探索 看護教員が認識している看護及び質の高いケアを提供するための条件の探索
探求のレベル 2 研究課題タイプ 関係探索	患者の認識	患者のケアリング行動の認識と人格の関係の探索 患者が認識しているケアリング行動の重要性の探索	ケアリングに関する患者の認識と患者のセルフエスティーム、欲求コントロールなどの人格特性との関係の探索 患者が認識している重要なケアリング行動と重要でないケアリング行動の比較
	患者・看護者関係	ケアリング行動に関する患者と看護者の認識の違いの探索	ケアリング行動の発生と重要性に関する患者と看護者の認識の比較 クリティカルケアの場面において患者が期待しているケアリング行動と看護者が評価した症状・状態の比較
	ケアリングの学習・教育	ケアリングのモラルに関する看護学生と医学生の違いの探索 看護学生のケアリング能力と関係のある要因の探索	看護学生と医学生のケアリングのモラルの比較 学生がこれまで受けてきた母性的父性的ケアおよび看護学部の特徴とケアリング能力の関係の探索
探求のレベル 3 研究課題タイプ 関連検証	ケアリングの学習・教育	学生の態度にケアリング教育プログラムが影響することの検証	障害者へのケアリング教育プログラムは学生の障害者への態度に影響することを検証する

3 欧米文献における研究の探求レベルと研究結果の性質

1) 因子探索型研究によって探索されたケアリングに関わる概念 (表3)

探求レベル1の因子探索型研究結果より得られた結果の内容分析から、探索された概念とその性質を抽出した。

まず「ケアリングの性質」に関わる概念として、ヒューマニズム、良心からわき上がる気持ち、ここにある存在としてのケア、ともにある、ためにおこなう、空間や時間を超える、創造するなどの概念が研究から得られていた。次に「看護の専門性」に関わる概念として、ホリスティックケア、専門性、実践、患者へのサポートの概念が研究結果から得られていた。「ケアリングの効果」に関わる概念としては、患者の対処行動の獲得、患者の成長と発達、患者への Well-being の概念が得られており、「ケアリング関係」に関わる概念としては、互いに知り合おうとする関係という概念が得られていた。以上の概念とその性質は「ケアリングの本質」として分類された。

次に「患者が認識している看護者のケアリング能力」に関する概念として、困難な仕事に対する臨床能力、看護者の積極的な態度、患者を個人的に知ろうとする、個人的なケアを行う、親しみやすさ、情緒的身体的サポートの概念が得られていた。「患者が認識しているケアリング関係」に関する概念としては信頼を築いていくもの、情け深い接近、患者と看護婦の関係、発展過程としてのケアリング関係があった。また「患者が認識しているケアリングの効果」に関する概念として、心理社会的健康の促進、身体的健康の促進、自己確信の促進、価値を認められること、などがあげられた。以上の概念は「ケアリングに関する患者の認識」として分類された。

また「患者・看護者関係」に関わる概念として、信頼関係の構築、ともに過ごす過程で発展する、互いに知り合おうとする関係が得られた。「看護婦が行っているケアリング行動」に関する概念として、患者の支持、精神的身体的環境の支持、擁護、激励、安楽、安全確保、身体的ニーズの充足、家族へのエキスパートなケアの提供

(表3) 因子探索型研究によって探索されたケアリングに関わる概念

分類	概念の性質	研究結果から得られた概念
ケアリングの本質	ケアリングの性質 看護の専門性 ケアリングの効果 ケアリング関係	ヒューマニズム、良心から湧き上がる気持ち、ここにある存在としてのケア、ともにある、ために行う、spacelessness、分離時を過ごす、timelessness、Creating home ホリスティックケア、専門性、実践、患者へのサポート 患者の対処行動の獲得 患者の成長と発達 患者の well-being の向上 互いに知り合おうとする関係
ケアリング行動に関する患者の認識	患者が認識している看護者のケアリング能力 患者が認識しているケアリング関係 患者が認識しているケアリングの効果	困難な仕事に対する臨床能力、 看護者の積極的な態度、患者を個人的に知ろうとする 個人的なケアを行う、親しみやすさ 情緒的サポート、身体的サポート 信頼を築いていくもの、情け深い接近、患者と看護婦の関係、発展過程としてのケアリング関係 心理社会的健康の促進、身体的健康の促進 自己確信の促進、価値を認められること ケアリング体験のメタファ
看護者の実際のケアリング行動	患者・看護者関係 看護婦が行っているケアリング行動	信頼関係の構築 ともに過ごす過程での発展、互いに知り合おうとする関係 患者の支持、精神的身体的環境の支持、維持、調整 安楽、安全確保、身体的ニーズの充足 擁護、激励 家族へのエキスパートなケアの提供
ケアリングの学習・教育	ケアリング行動の教授法 ケアリング行動の学び方	反面教師 ロールモデル 困難な課題としてのケアリング イメージする、 知識と体験から構築する、関連付ける 分かち合う、感じる、たくさんの感情の経験 発達としての学習

という概念が得られていた。以上の概念の性質から、＜看護者の実際のケアリング行動＞として分類された。

最後に＜ケアリングの学習・教育＞として分類されたカテゴリーをみると、まず「ケアリング行動の教授法」に関する概念として、反面教師、ロールモデルなどの概念が得られていた。「学生のケアリング行動の学び方」に関する概念として、困難な課題としてのケアリング、イメージする、知識と体験から構築する、関連付ける、分かち合う、感じる、発達としての学習などが得られていた。

2)関係探索型研究によって探索された概念間の関係

関係探索型研究によって探索された関係については大きく分類して、＜患者と看護者のケアリング行動の認識の関係＞、＜患者のケアリング行動の認識と属性の関係＞、＜ケアリングの学習・教育に関する関係＞の3つのカテゴリーがあった。

最初の＜患者と看護婦のケアリング行動の認識＞の関係については、実際の緊急度と患者の

ケアリング行動への期待度との関係、病棟の特徴別の患者のケアリング行動に対する認識と看護者の認識の関係、ケアリング行動の発生と重要性に関する患者と看護者の評価の関係などが探索されていた。

次に＜患者のケアリング行動の認識と患者の属性＞の関係については、患者の年齢がケアリング行動の認識と関係していること、セルフエスティーム、要求の度合い、痛みの程度などが看護婦との出会いを通してケアリング体験と関係していることなどが探索されていた。また効果的なコーピングとケアリング体験が関係していることが探索されており、ケアリング体験とケアリングの効果の関係が得られていた。

最後に＜ケアリングの学習・教育＞に関する関係では、ケアリングのモラルと学部での教育との関係がないこと、ケアリングのモラルは性別と関係があること、学生が受けてきた母性的ケアの程度と看護学部のケアリングに関する風潮と看護学生のケアリング能力との関係が得られていた。

(表 4) 関係探索型研究によって探索された概念間の関係

分 類	研究によって探索された概念間の関係
患者と看護者のケアリング行動の認識の関係	患者の治療の緊急度が低いほど患者のケアリング行動への期待は高い 精神科、内科における患者と看護者のケアリング行動の認識は看護者のほうが高い 外科における患者と看護者のケアリング行動の認識は患者のほうが高い ケアリング行動の発生と重要性については患者と看護者の間の評価は一致しない
患者のケアリング行動の認識と患者の属性の関係	セルフエスティーム、要求の度合い、痛みは看護婦との出会いを通してケアリング体験と関係 若い患者ほどケアリング行動の認識が肯定的 ケアリング体験は効果的なコーピングと関係
ケアリングの学習・教育	ケアリングのモラルは看護学生と医学生で変わらない ケアリングのモラルは学生の性別に関係 看護学生のケアリング能力は受けてきた母性的ケアが低いあるいは高いときに高い 看護学生のケアリング能力は学部のケアリングに関する風潮や教育と相関

4 日本のケアリング研究の動向 (表 5)

日本のケアリング研究論文については、われわれが検索し研究対象とした実証的な研究は操ら(1997)が行った1件のみである。その探求レベルは2で関係探索型研究であった。すなわち、ケアリング行動に関する患者と看護者の認識の違いを

探索する目的で、患者 281 名、看護者 323 名に対してCBAによるケアリング行動の評価を調査しており、日本においても患者と看護者のケアリング行動の重要性の認識には違いがあることを探索していた。

(表5) 日本におけるケアリング研究論文

著者	年	研究課題のタイプ	研究目的の種類	研究方法	結論
操 華子	1997	関係探索	ケアリング行動に関する患者と看護者の認識の違いの探索	患者281名、看護者323名 ケアリング行動測定用具 CBA 記述統計による分析	1 重要であると認識した行動の違い 患者：看護婦の専門知識 適切、安全なケアの提供 看護者：精神面の働きかけに関する内容 患者よりも看護者の方がケアリング行動を重要であると認識 2 重要であると認識した共通の行動 安心、ケアに関する知識、頼みやすい雰囲気 を看護者がもつ

IV 考察

1 ケアリングに関する研究論文から得られた結果の看護実践に関する有用性

M.S.Roach (1992) は、ケアリングの概念の定義はなぜ私たちが自分のケアのみならず他人のケアをしようと思うのかという問いから出発する必要があると述べている。すなわちケアへの価値付け、動機、道徳などを解釈し表明していくことがケアリング概念の研究の初期には必要とされた。1970年代後半から1980年代後半にかけてこのようなケア／ケアリングの概念の発展がなされ、M.M.Leininger (1978) ,P.Benner (1984) ,J.Watson (1985) ら主要なケアリング理論の発展に貢献した理論家が出そろった。日本においても欧米のケアリング概念に関する文献研究がなされ、欧米におけるケアリング概念が筒井 (1993)、近田 (1993)、樋口 (1993) によって紹介されてきた。われわれはこのような背景を踏まえ日本に急速にケアリング概念が導入された1993年以降のケアリングに関する文献を検討してきた。

記述型、仮説生成型の研究が大部分を占め、仮説や理論を検証している原著論文は1件しかなかったが、報告レベルではD.Atrickland (1996) によるワトソン理論の検証など、検証型の研究の試みもなされている状況である。

一方、因子探索型研究の研究目的の種類および探索された概念の性質をみると、看護実践の各領域からの疑問に基づいた、より具体的な概念の探索に重点が置かれていることがわかる。これには近年の看護学における質的な研究方法の発展と普及が大きな影響を与えていると考えられる。

特に、患者のケアリング行動に関する認識や看護学生の認識に関する意味の探索を行おうとしている研究論文が目立つ。C.L.Montgomery (1995)

によれば、ケアリングはケア提供者から始まるものではあるにしろ、ケアするものとケアされるものとの相補的關係に基盤を置くものである。この文脈で考えれば、ケアを受けるもののケアリング行動の認識や意味を探索し、その構造を豊かにしていくための因子探索型研究は重要である。

またケアリング能力の獲得は個人的な成長と同調しながら進むと考えられ、ケアリングの専門職である看護者のケアリング能力の発達はまさにその人個人の発達過程や体験の意味と成長の促進という事柄を抜きにしては考えられない。これらの領域の研究論文から得られたより具体的な概念は患者理解や学生のケアリング教育に活用していく際に重要であると考えられた。

一方研究目的にほとんど見当たらず、研究結果から得られた概念の性質にもほとんど含まれていない概念として実際のケアリングの効果が患者にどのように現れているのかという研究課題がある。患者が認識しているケアリングの効果に関する概念はいくつが得られているが、実際にケアリングの効果がどのように現れるかについては新たな因子は探索されていない。

操ら (1996) の文献研究ではケアリングによってもたらされるアウトカムとして、患者のアウトカムが10項目程度内容分析によって得られているが、臨床実践に活用するためには、更に具体的なレベルにおろして効果の評価の視点を記述していく必要があるのではないかと考えられた。

次に関係探索型研究の研究目的と研究結果をみると、ケアリングの学習教育に関する研究、患者と看護婦のケアリング行動の認識のずれに関する研究に焦点が当たったものが目立つ。また患者のケアリング行動の認識と患者の属性との関係を探している研究もあった。ここでも実際のケ

アリング行動とその効果の関係を探索している研究はほとんどない。1件のみあった関連検証型の研究はケアリングの教育・学習の教育プログラムの効果検証であった。

以上のことから、その原因として、ケアリングの効果が検証型研究のために仮説を立てられるほど操作的になっていないこと、そのため測定用具の開発が困難になっていることが考えられる。

2 ケアリングに関する研究の欧米と日本での探求レベルの比較

ケアリングに関する日本の研究の状況は欧米と比較するまでもなく非常に数少ない。1993年当時にケアリングの概念が急速に紹介された後、日本の文化における実証的な研究が育っていないことを指摘せざるを得ない。特に日本の文化の中で展開されている日本独自のケアリングに関わる概念を探索しようとしている研究がない。このことにより、臨床の知として存在しているが記述されていない日本独自ケアリングのありよう、たとえば看護者の患者への思いやりや、家族へのいたわり、看護者の察する能力などが実証されていない可能性がある。

日本でケアリング概念を焦点に据えた研究が拡大しない理由が何かを模索してみることも必要であると考えられる。

3 ケアリングに関する研究の今後の課題と方向性

ケアリングに関する研究の今後の課題として、日本におけるさまざまな看護領域におけるケアリング行動、ケアリング行動に対する患者と看護者の認識及びケアリングの効果に関する概念を探索し、構造化していく必要がある。また上記の研究で得られた概念に関して、欧米の研究論文と比較してその共通点と相違点を示していくことが必要であると考えられる。

次にケアリング行動に関する測定用具の開発が必要である。海外との比較のためには、すでに開発されているケアリング測定用具を日本語版にするための研究が必要とされる。また日本独自のケアリング行動やケアリングの効果があるとすれば適した測定用具が必要になってくると考えられる。

以上の研究をもとにケアリング能力の発達過程を明らかにしたり、影響する要因を特定したりする研究を行えば、その結果が看護教育のプログラムやカリキュラムの改善につながっていくと考え

られる。

ケアリングという概念は看護の実践を行っている場実際に存在している。これを実証していくことは看護の価値や専門性を高めるのみならず、患者のケアを行うという看護のもつ本質を洗練していくことにつながる。その際、看護の内面の豊かさを構築するような因子探索、関係探索型の研究を丁寧に行っていくことと同時に、探索された因子や関係を活用して状況を予測したり、状況を作り出したりしていくような検証型の研究も行うことを視野に入れておく必要があると考えられる。そのための研究方法論の開発も待たれるところである。

V 結論

われわれは過去5年間のケアリングに関する研究論文の文献検討から以下の結論を得た。

- 1 欧米で行われている因子探索型の研究については、その扱っている研究対象領域がより豊富になり、結果で得られた概念も中範囲の測定可能な概念に近づきつつある。これには近年の看護学における質的な研究方法の発展が寄与していると考えられる。
- 2 本研究においては、患者のケアリング行動に関する認識、およびケアリングの教育・学習に関する概念は豊富に出されていたが、ケアリングの効果に関する概念は、患者が認識しているもののみにとどまっている。
- 3 日本のケアリング研究は欧米文献の紹介から実証的な研究に到達していないといわざるを得ない。特に因子探索型の研究がほとんどないことで日本独自のケアリング行動が概念化されていないため、その後の実証的な研究が継続できない。
- 4 今後の課題として日本におけるケアリング行動、ケアリング行動に関する患者・看護者の認識、ケアリングの効果などについて、探索型研究を丁寧に行い、ケアリング概念の構造化の発展を図る必要がある。また同時に得られた概念を活用して検証型の研究を行っていくための研究方法論についても議論していく必要がある。

文 献

- Anitta Juntunen.,Merja Nikkonen.(1996): Professional nursing care in Tanzania : A descriptive study of nursing care in Ilembula Lutheran Hospital in Tanzania, *Journal of Advanced Nursing*,24 : 536-544.
- Barbara L.Paterson.,Marta Crawford.,Marian Saydak.,et.al.(1995): How male nursing students lean to care,*Journal of Advanced Nursing*,22 : 600-609.
- Barbara M.Raudonis.(1993):The meaning and impact of empathic rerationships in hospice nursing, *Cancer Nursing*,16(4): 304-309.
- Carol Leppanen Montgomery.(1993), 神郡博, 濱畑章子 訳(1995): ケアリングの理論と実践, 医学書院.
- Catherine A.Chesla.(1996):Reconciling tecnologic and family care in critical-Care Nursing ,*IMAGE-Journal of Nursing Scholarship*,28(3): 199-204.
- Cheryl Tatano Beck.(1995): Nursing students' experience caring for cognitively impaired elderly people, *Journal of Advanced Nursing*,23 : 992-998.
- Christine Pollack Latham.(1996):Predictors of patient outcomes following interaction with nurses:Westan *Journal of Nursing Research*,18(5): 548-564.
- Donna Atrickland.(1996): Applying Watson's theory for caring among elders,*Journal of Gerontological Nursing*,July.
- Donna Diers.(1979), 小島通代, 岡部聡子, 金井和子 訳(1984): 看護研究, 日本看護協会出版会.
- Elizabeth Davies.(1995): Reflective Practice : A Focus for Caring, *Journal of Nursing Education*,34(4): 167-174.
- Elizabeth.Peter.,Ruth Gallop.(1994): The ethic of care:A comparison nursing and medical Students,*IMAGE-Journal of Nursing Scholarship*,26(1): 47-51.
- Gregory Poole.,Kathleen Rowat.(1994): Elderly clients' perceptions of caring of a home-care nurse,*Journal of Advanced Nursing*,20 : 422-429.
- Harry A.Milne.,Carol L.McWilliam.(1996): Considering nursing resource as 'caring time' ,*Journal of Advanced Nursing*,23 : 810-819.
- 樋口康子(1993): 看護におけるヒューマン・ケアリングー多元論的研究方法を求めて, *看護研究*, 26(1): 33-39.
- Jean Jenny.,Jo Logan.(1996): Caring and comfort metaphors used by patients in critical care,*IMAGE-Journal of Nursing Scholarship*,28(4): 349-352.
- Jean Watson.(1985), 稲岡文昭, 稲岡光子 訳(1992): ワトソン看護論, 医学書院.
- Katherine Kinb(1993): Chronically Ill Patients' Perceptions of Nursing Care,*Rihabilitation Nursing*,18(2): 99-104.
- Kathleen Nash Huggins.,William M. Gandy.,Catherine Denise Kohut.(1993): Nurse Caring in the emergency department ; Emergency department Patients' perception of nurse caring behaviors,*Heart & Lung*,22(4): 356-364.
- Lyn Coulon.,Magdalena Mok.,Kerri-Lee krause.,et.al.(1996): The pursuit of excellence in nursing care : what does it mean ? ,*Journal of Advanced Nursing*,24 : 817-826.
- Lorraine Trojan.,Olive Yonge.(1993): Developing trusting,caring relationships : Home care nurses and elderly clients,*Journal of Advanced Nursing*,18 : 1903-1910.
- Louise von Essen.,Per-Olow Sjoden.(1995):Perceived occurrence and importance of caring behaviors among patients and staff in psychiatric,medical and surgical care,*Journal of Advanced Nursing*,21 : 266-276.
- M.Simone Roach.(1992), 鈴木智之, 操華子, 森岡崇 訳(1996): アクト・オブ・ケアリング, ゆみる出版.
- Madeleine M.Leininger.(1991), 稲岡文昭 監訳(1995): レイニンガー看護論, 医学書院.
- Margaret Mary.,Rubritz Kosowski.(1995): Clinical learning experiences and professional nurse caring : A critical phenomenological study of female baccalaureate nursing students,*Journal of Nursing*

- Education,34(5): 235-241.
- Marilyn H.Oermann.,Carolyn L.Lindgren.(1995): An educational program's effects on student's attitudes toward people with disabilities : A 1-Year Follow-up,20(1): 6-10.
- 操華子, 羽山由美子, 菱沼典子他(1996): ケア／ケアリング概念の分析, 聖路加看護大学紀要, 22 : 14-28.
- 操華子, 羽山由美子, 菱沼典子他(1997): 患者・看護婦が認識するケアリング行動の比較分析, Quality Nursing,3(4): 63-71.
- Patricia Benner.(1984), 井部俊子, 井村真澄, 上泉和子 訳(1992): ベナー看護論, 医学書院.
- Patricia J.Larson.(1995): Oncology nurses as caregivers ; Important nurse caring behaviors perceived by patients with cancer,Oncology Nursing Forum,22(3): 481-487.
- Priscilla R.Simmons.,Sally Cavanaugh.(1996): Relationships among childhood parental care,professional school climate,and nursing student caring ability,Journal of Professional Nursing,12(6): 373-381.
- Ruth Bernstein Hyman.,Wilma Bulkin.,Pierre C.Woog.(1993): The staff's perception of a skilled nursing facility,Qualitative Health Research,3(2): 209-235.
- Sharon A.Mcnamara.(1995): Perioperative nurses' perceptions of caring practices,AORN Journal,61(2): 377-388.
- Sipra Janhonen.(1993): Finish nurse instructors' view of the core of nursing,30(2): 157-169.
- Siv Herberts.,Katie Eriksson.(1995): Nursing leaders' and nurses' view of health,22 : 868-878.
- 近田敬子(1993): 看護におけるケアリングの概念－「ケアリング」の概念と研究方法を模索して, 看護研究, 26(1),40-47.
- Tommie P.Nelms.(1996):Living a caring presence in nursing:a Heideggerian hermeneutical analysis,Journal of Advanced Nursing,24 : 368-374.
- Tommie P.Nelms.,Josephine M.Jones.,D.Patricia Gray.(1993): Role modeling : A method for teaching caring in nursing education,Journal of Nursing Education,32(1): 18-23.
- 筒井真優美(1993): 看護におけるケアリングの概念－ケアリングの概念, 看護研究, 26(1): 2-23.
- Victor Ming Ho Lau.,Ann Mackenzie.(1996): Attributes of nurses that determine the quality of care for mentally handicapped people in an institution,Journal of Advanced Nursing,24 : 1109-1115.
- Wendy Reid.,Ann Long.(1993):The role of the nurse providing therapeutic care for the suicidal patient,Journal of Advanced Nursing,18 : 1369-1376.
- Zane Robinson Wolf.(1994): Nurses' responses to organ procurement from nonheartbeating cadaver donors,AORN Journal,60(6): 968-981.